

東ティモールツアー報告③第2日目 2010年8月30日(月) 晴れ(熊谷有理)

住民投票記念日で休日。午前中は PARCIC 伊藤淳子さんの案内でディリ市内を観光し（明星大学グループはホテルで研修）、昼食後マウベシへ移動した。

1. ディリ市内観光

はじめに住民投票記念式典を見学する予定だったが式典が行われる気配がなかったので諦めた。マイクロバスでディリ市内の7カ所を以下の順に見学した。

(1) 国会議事堂

以前は東南アジアで最大のカトリック教会だったが、第二次世界大戦で日本軍の空爆によって破壊された。現在の建物はオーストラリアの支援で再建されたもの。



<ディリ大学側の門>

(2) ディリ大学

国会議事堂の正面に位置する東ティモール唯一の国立大学（私立大学はディリに2校ある）。このキャンパスは農学部と経済学部で、ディリ郊外に工学部がある。工学部では JICA による技術指導が行われている。大学に学生寮はないので、地方からの学生はディリ市内の親戚の家などに住んで通っている。

大学は2学期制で、4年間の授業の後に卒業論文を書いて学位を取得する。学生はたいてい、卒業論文の研究資金を稼ぐため4年目が終わると働きに出るが、そのまま大学に戻らず卒業できない場合も多いらしい。学位の授与は2年に1回のみ行われる。

この日は休日で授業はなかったものの、キャンパスには十数人の学生が来て

いた。英語が話せる者もいた。



<廊下>



<広場>



<教室>

(3) 大統領府

2008年に中国政府の資金によって建てられた。広大な敷地の手前の広場は誰でも利用できるインターネットアクセスポイントとなっている。正門は閉まっていたが、警備員と交渉すると、脇の門から入って建物のロビーまで見学する許可を意外と簡単に出してくれた。

玄関先には民族衣装を身につけた来賓案内担当の職員が待機しており、私たちが写真撮影したいと言うと奥の方からもぞろぞろと集まってきた。頭にはパイナップルのような羽飾り、白いタンクトップにカラフルなたすき、黒っぽい巻きスカートを白帯で締めて、片手に剣、腰に携帯電話。皆楽しそうに写真撮影に協力してくれた。彫刻がほどこされた木造りの立派な扉を抜けると、ロビーでは恐竜の化石が展示されていた。この恐竜展は、シャナナ・グスマン首相の夫人が UNESCO の特使だった時にディリの別の場所で開催した展示を移設してきたもの。普段から一般公開されているのかどうかはわからなかった。



<正門>



<インターネット広場>



<来賓出迎え職員>



<玄関>



<ロビー>



<ロビー展示>

(4) 受容真実和解委員会資料館

2001 年、国連暫定統治機構は 1975～99 年のインドネシア支配下で起こった人権侵害の実態を調査するため、受容真実和解委員会を設立した。2005 年の解散まで委員会の本部が置かれたのが、元刑務所だったこの建物。建物の修復には日本政府が資金援助した。現在は独立運動の歴史資料館として一般公開されており、委員会の報告書などを閲覧できる。この日は休日で閉館していたので、後日訪問することにした。

(5) サンタクルズ墓地

1991 年 11 月 12 日に起こったインドネシア軍による東ティモール市民大量虐殺の現場。事件の当日は、その 2 週間前にディリの教会でインドネシア軍の襲撃を受け殺害された独立派の青年セバスチアン・ゴメスさんを弔う儀式が同じ教会で行われていた。その後、参列者が教会からサンタクルズ墓地まで行進を始め、行進は次第に独立を叫ぶデモと化した。そこにやってきたインドネシア軍は、墓地に集まってきた人々に対し、突然無差別に発砲を始めた。パニックの中、人々は墓地に逃げ込んだが、インドネシア軍は追いかけて虐殺を続けた。その場で亡くなった人もまだ生きていた人もインドネシア軍に連れ去られ、正確な被害者数は不明のまま、彼らの遺骨も見つかっていない。現在、外国の専門家を招いて遺骨の発掘調査が行われている。

サンタクルズ墓地には、鮮やかな造花が供えられた様々な形の墓が所狭しと並んでいる。これ以上新しい墓をつくるスペースがないので、最近ディリの反対側の郊外に新しい墓地がつくられた。現地の墓参り習慣は日本より熱心なようで、11 月 1 日の死者の日以外にも、夢に先祖が出てきたりすると墓参りに行く人もいる。葬儀や墓の様式はキリスト教だが、土着の先祖崇拜的な信仰の影響はまだ残っている。



<墓地の入り口>

<墓地内の教会>

<セバスチアンさんの墓>

(6) デイリ国立病院

デイリには国立病院が 1 つと公的なクリニックが 3 つあり、無料で医療を受けられる。医師はキューバ人が多い。病院はクリニックで十分に診療できない患者や救急患者を受け入れている。この日は休日のため、救急外来のみ開いていた。

民間のクリニックとしては、修道院が運営しているところや植民地時代から外国人医師が開業しているところが多少ある。また、日中は病院に勤め、夜間薬局で診療を行う東ティモール人の医師もいる。薬局は薬を売る目的もあり医師を雇っていて、診療代も 1 回 7 ドルと高いが、共働きの家庭など日中病院を受診できない人々によく利用されている。このような診療が法的に認められているのかどうかは不明。



<国立病院>

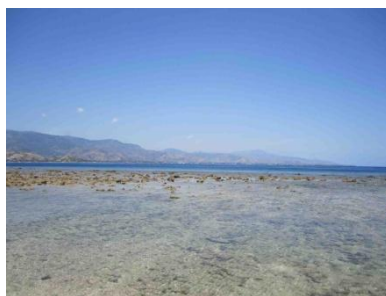
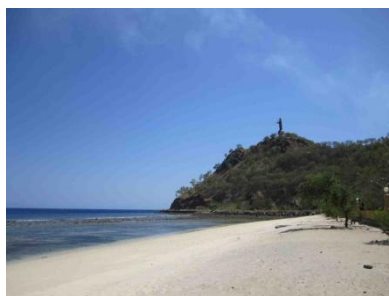
<外来の待合場所>

(7) キリスト像の見える砂浜

デイリ中心部から東へ車で 10 分ほど行ったところにある岬の先端に、インドネシアが 1980 年代に建てた大きなキリスト像がある。像は地球儀の上に乗し、両手をジャカルタの方角に向けて広げている。

像が立つところまで登って行けるが、今回は登らずに下の砂浜でのんびりすることにした。砂浜には私たち以外に数人しか来ていなかった。海は透きとおる波は静かでとても美しかった。

帰りがけに、イエズス会のオーディオヴィジュアル部門（CPA：<http://www.cpatimorleste.org/>）のスタッフに呼び止められ、急遽ビデオ取材を受けることになった。ツアー参加者の熊谷が東ティモールの観光について「想像していたより平和でとてもきれいなところだと思う」など英語で感想を述べた。映像は後日上記のウェブサイトに掲載されるとのことだった。



＜岬上のキリスト像＞ ＜ディリ市街の方角＞

2. 昼食

キリスト像を見学した後、ディリ市街に戻る途中の海岸沿いにあるタイ・レバノン料理レストランで明星大学グループと合流し、昼食をとった。昼食には、インドネシア支配時代に **RENETIL** という学生の独立運動団体に活動していたジョゼ・ネヴェスさんが同席し、彼自身の活動の経歴について話してくれた（午前中はホテルで明星大学グループに講義をしていた）。

RENETIL は1988年に当時インドネシアに留学していた東ティモールの大学生によって組織され、両国における抵抗運動、そして諸外国で東ティモールの独立を支持していた人々の活動を誘導した。ジョゼさんは1986～88年にジャワ島マランに留学していた時 **RENETIL** に加わり、インドネシアと東ティモールを行き来しながら1999年の住民投票まで独立運動を続けた。その中で多くのメンバーが逮捕され、ジョゼさん自身も1992年に団体の代表となったが1994年に逮捕され1997年まで拘束された経験を持つ。住民投票直後は **Timor Aid** という **NGO** で緊急援助の仕事に携わった。

ジョゼさんは、東ティモールはいまだに色々な問題を抱えているが、これからの時代を担う若者たちにそれらの問題を解決してってもらいたい、そのためには教育が重要だ、と語っていた。

私たちが食事中、驚いたことにシャナナ首相一行がレストランにやってきた。

彼は独立運動の英雄で初代大統領を務めたほどの人物だが一般市民との距離が近く、前日の夜に政府庁舎前広場で行われた住民投票記念コンサートでもほとんど護衛なしで自らビデオカメラを回していた。彼のこのような行動が東ティモールの人々の親しみを誘うのだろう。

3. ディリからマウベシへ

午後、車 2 台でディリからマウベシへ移動した。伊藤淳子さんは仕事でディリに残らなければならなかったもので、通訳として PARCIC 現地スタッフのクリスナツミさんとインターンのトウシャサユリさんが同行した。マウベシで必要のない荷物はディリの PARCIC 事務所で預かってもらった。

ディリを出る前に、マウベシでコーヒー収穫に使う籠（ゴテ）を買うため、郊外のハリラン市場に立ち寄った。野菜から鶏、日用品や衣類まで、ありとあらゆる品々が売られていた。中でも、ツアー参加者の荒井さんがここで買った小さな激辛チリは、マウベシのロビゴ集落での食卓で大活躍することになった。

マウベシはディリから南へ 30km 程度しか離れていないが、山に隔たれていて蛇行したガタガタの道を登るので 3、4 時間はかかる。途中、眼下にディリの港を一望することができた。道路沿いには集落が点々とあり、広い谷間で稲作を行っているところもあった。標高が上がるにつれ気温は下がっていく。マウベシに着いたのは夜 8 時過ぎで、長袖でも寒いくらいだった。

この夜は、PARCIC マウベシ事務所スタッフのネルソンさん、レオさん、ジョルジュさんらと一緒に街のレストラン SARA で食事した。宿泊したのは街の中心から少し外れた丘の上にある Hotel Pousada。元はポルトガル植民地時代に別荘として使われていた建物で、白壁瓦屋根のこぎれいな造りだった。マウベシでは夜 6 時から 12 時まで電気が通っていて（運が良ければ）お湯も出るので、防寒さえしていれば快適だった。

電気があるといってもマウベシは小さな街でディリよりずっと暗い。日本ではもちろん、ディリでも見ることはできなかった天の河の流れる満天の星空に、ツアー参加者一同感動をおぼえた。



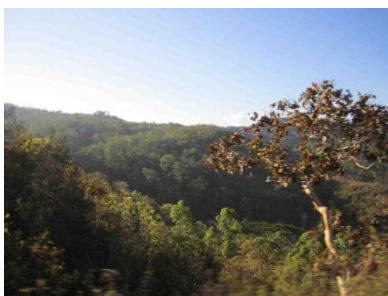
<ハリラン市場>



<右側のチリが大活躍>



<山からディリを一望>



<山を覆う森林>



<山間の稲作地帯>

photo@Yuuri Kumagai